



饑饉

禁

291  
7  
1-38



三河志

三河

渡邊政香輯録

饑饉部

世亦五穀れ乏しと饑饉といふまゝと毎委々といふは廣  
 野亦五穀の熟ふと饑といふ野菜れ乏しと饉といふ韓詩是也  
 曰し説文ニ菜蔬の熟ふと饉といふなり前説ハ鄭遠河也也  
 といふ五穀菜蔬の乏しと云夫は亦一般の饑饉ハ歷代數々見  
 ゆべきと三河國の饑饉亦史又見えしハ

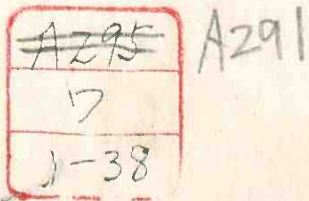
天日女史十二卷大寶

人皇四十一代持統帝年号

三年庚戌冬

河遠江美濃賤賑贍之とあり大御惠と賜ひ

見え又按



口史 十四卷 十三丁 和銅 早代元明帝 二年 三河饑賑贍之と云次

和銅六年癸丑十一月三河國大風損菽免調庸とも云はゆひ  
口年乙卯二十六日丙午参河地震百姓廬舍併々陷没とも云  
えんく 口史十九卷十九丁三載あり

此御代ハ三河國大風と云穀と損し地震と云人家壞とし如ハ  
生民此如多ク想像<sup>ラモヒヤラシ</sup>ゆるかき

天平神護 四十六代孝謙帝 元年 参河飢咸賑贍之と云

日本史 十九卷 亦云えんく咸の字抄ハ格別ハ御意と編りて叙

別と云

又天平寶字 孝德帝 元年 八年三月四日早詔免今年調庸

十之七八と云く此御代ハ三河國早損と云定りの御年貢  
十の内七八日ハ御省免何しと云又按

日本史 十八卷 十二丁 四十七代 廢帝六年壬寅十一月廿六日是歲参河

早賑給之と云く此御代ハ三河國早也又按日本史 十三卷

弘仁 孝仁代 嵯峨帝 元年 庚寅十一月三河國飢遣使賑給之

と云く 敕使と下りて御意と編りてと云又按

日本後記 五卷 三十四丁 大同五年庚寅十月参河國飢遣使賑給之と云

五十三代淳和帝十四年六月以早疫免今年庸 日本史 十三卷

亦載をり此御代ハ早損めと云く此疫<sup>ヤラヒヤラシ</sup>亦く人民悩<sup>ウラヒ</sup>今年の

御年貢ハ御取立形として御省免何せ居と云く又

五十四代仁明帝五年戊午從是月冬河涸天雨物如灰と日  
本史 廿五卷ニ云ク 灰の如き物降り十年癸亥六月是月冬  
河涸飢賑恤之

梅祇武創業録 卷五元龜元年八月大七日暴雨烈風冬遠ノ二列  
殊ニ作毛皆損シ家屋大ニ破ルト云

門卷七天正二年遠三二列稻麥不熟云

門卷十四天正十三年十月廿九日大地震今年飢饉疫癘死者不可勝計

門卷廿四慶長十二年六月大十二日頃日遠冬久シク旱魃スル如甚  
雨ニ大ニ歡一ト云

門卷十五天正十七年二月五日東海道大地震と云

門卷廿三慶長十年六月大廿日江濃勢尾冬五ヶ国洪水

門卷廿五門十四年八月小廿六日諸国洪水當正月ヨリ晴天殆ト  
稀ニ雨降ル

五龍子天宮此大御意ニ叙リク物々ニカク小明の代  
亦ハ山西ト云ル大旱亦ク五穀熟ズ人民飢死スルもの歎也  
志ハ華シクハ平城ト云ル大形ノ坑ト云ル



後桃園天皇清代天明三年六月晦より七月七日まで  
 何れとも云はれ大なる雷なり頭上より雷の如し戸障子  
 是よりなる鳴り響きけ今も天地の響くこと人々怪しむる夜も  
 麻原よりなる後より上列浅る嶽の境を向て行くと  
 戸障子までと云ふ事あり大なる巖とて中亦吹向事其山の麓四五  
 里或は十里の間は高き音之聲の怪我りふもさるなり石亦  
 塵と死するもの其教幾千人なる事と云ふはけは異事  
 何れやと人の胸冷しなる饑饉の表と云ふはけ  
 此は天の四年といふ年花五穀熟やれ饑饉と云ふ他  
 亦亦穀の産地は略しあり三河亦あり

是の  
 〇

日本紀三

額宗天皇朝天下

安平百姓殷富稻

一斛銀錢壹文

清和天皇

貞觀八年二月詔

定穀之價京師

白米一升直四文

黑米一升直三十一文

米	石	拾貳俵七八ト
播	石	四斗八升
何れ	石	八斗
綿	石	拾三斤
綿	石	拾貳貫目
浅	石	五貫五百文
米	石	拾貳貫目
乾菜	石	三連
大根	石	三斗

但し夏大根の大あり

加ふる事あり其の食しにもの價形多れは力及り海に出る

残菜と摘み山跡に出て糠の糞と捨ひ粉の糞を糞子と称し  
或は夜の糞を糞子とせり細うの糞を糞子と稱し糞子とせり  
食とし粥く飢と凄まじり四年も言せり

天明五年とふ年の秋五穀豊ふとあり人々去年の饑と  
忘りて歡ひたる五年も言せり

天明六年とふ年又秋五穀熟や原五穀の言は四年  
同じ其飢まじりぬ擧ぐかき入難し其言と擧ぐ示ん  
或里夫死しと娘姑と子三人と養育せり元も貧し  
儲け多しハ查六跡山とありまはれまはれと捨ひ夜三時子  
と娘と姑と子と養ひたり或夜十六日の修り者行書

宿とせひと姑日宿借次ハ言安きとも食物取し外へ行と宿  
修りといふ修り者日食物用意きれいそつ夜とめし  
修りといふ修り者日食物用意きれいそつ夜とめし  
い余と喫いそつ夜の隅にけり修りの方とえり娘かひ  
がひとけりおのおと福と意姑も言せり子とせり修り  
者も病しとぬおに圍爐裏の例はありといふ修り物と食  
の苦しといふ言はかり修りといふ言はかり修り  
せり娘と修りといふ修り山とあり木の葉と捨ひまはれ  
おせり言はかり修り物とあり修りといふ言はかり  
修りといふ修り者ありといふ修りといふ修りといふ修り

かゝるは僅然とともおるを其の食へ給へしと云はれぬ  
と姑の前又吾の食へ給へしと云はれぬ口加へ餓饑と云へ今日  
飢と云へともおる食へ給へし遠くは飢死と云へし我  
年老きぬはぬと云へ死ぬはぬを健と云へし  
小兒と養ひ給へしは子食へし小兒の養育は母といへ  
彼か<sup>の</sup>彼と云へぬの前は吾の給へしと云へしと云へし  
汝は小兒又吾の我命おるは汝と云へしはぬの心也  
何れも給へし吾の涙流しと云へしと云へし  
或は<sup>記</sup>ま橋おる子飼へしと云へしと云へしと云へし粥の<sup>記</sup>粥  
吾の心飢と苦しと道傍の溝又棄る大根と捨ひ食

せんとも溝は底く死に給へし世お徳のとも世る飢きるとも  
推しとも給へし

天明七年十一月廿五日の<sup>記</sup>飢饉前代未聞

石文付 永沙合七夕

世外新報も世重版に載せり故に略す

世の<sup>記</sup>世も此れ世干菜いさゝと煤ある豆の<sup>記</sup>と稗とせ  
と食へ給へしと云へし吾の給へしと云へしと云へし  
と稀し其村の神社或は此境内お曲突と築き大なる合  
米の粥と炊き口村の貧民に給へし他村の人お招き暫  
飢と濟ひたる





因曰本海老の介の道筋の茶店と桿の粉と餅と  
中尔糠味噌と入る何五文の醬ヒサく家供ありて一  
半と准くとも饑饉のいぬいぬ

天明七年とふ年も御書とて天明八年とふ年も  
一禁廷と名の神祇佛屋所家の焼失やう元五穀豊  
饒やうと天明九年より四十余年のち豊年打撃

拾五、本二巻の六徳或は四十一巻徳福の年も  
今君鷹満十人々本と塊の如くとい世にかくを  
麦と炊くい穀もいふるもあく貴もいとい  
穰も本より炊きこい食はるるのれはり  
徳長

しと精進の菜とていふはさきさきぬきと  
一于菜は田畑の肥しといふく食せば桿馬  
富は作らぬも稀にみるは御代は育める人  
饑饉とていふは信も人も古又三締給の  
さき向人の土用中の早さといひ狐貉の衣  
さる人の極寒の凍槍といふは  
とていふは信もいぬいぬ

天保四年といふ年北六の  
徳秀とていふは奥野といふ  
江戸といふ

石久身 本む合八夕

裏店其日過ぎの者書き巻ひ紙々書き遊るも何り  
其由上聞達一市仁恵行つ小屋と作り市濟本何ま  
場ひるし風也

或曰出羽秋田領新庄領はたかく物念より勤まはる  
る村の古人々黨と称し富有は農家押入り米穀家材  
と棄る級園くたれ其領内法とく佐行戸沢のあ候  
上心取の趣

拙者も由えり利害相りまけ利害中論し徒量子るあ者  
と法先百姓と共山跡と出く本此実善は根と強共食

と飢する者小悪く如く自然と虫と三除くとのい者も  
立ふは作分りむとと預きも上はたむと書かえり  
級園より 戸沢候に法儉約りせとく自口の飯本  
武合定のめと聞きり者能と云もつと  
この本名のおいふは熟しとあさうかし不熟とあり

凶年よりこれより後五穀のさむいなるは本年は也

米拾あ 拾二俵 諸河辺に俵余この後いさあ  
五俵より多しとあり設法能いさあ

麦 あ 中八俵 石久身とて書きたる余は米  
拾二俵

大豆 あ 八斗五二升

何れもあ 五石五斗

石久身 本む合ハタシ

裏店其日過ぎの者ハ書キ奉ルハ誰ク書ク跡ヨモ何リ  
其由上聞達一津仁恵行ツ小屋と作リ津濟本行ヨリ  
揚ヒヨリ聞也

白一文字

新店領ハ之等ノ物念ヨリ物念ハ  
トナシ昌有ル農家ノ押入米穀家材  
ト棄ル級園トナレハ其領内法トシテ作行ハ其ノ由候  
上ハ此取の趣

拙者ト由エリ行啓行ルモケ利害中論シ徒量テ有者ト  
之語先百姓ト共ニ山跡ト出クホ此莫キ其根と爲ル共食

之飢テ者小悪ノ如ク自然ト由テ之除ク之ハ有者ト  
立小ト作付ルハハト預キ上ヨモル言由エハ此取  
級園ヨリ 戸沢候ニ由儉約トナレテ自一石の飯米  
此取之定ヨリ聞クヨリ有者ト由テ之除ク之ハ有者ト  
之河本島ノ由ハ此取トナレテ不熟トナレテ

本年ノ何モレモ此取ト一般取ノ由モ由ハ本年ノ由

米拾取 拾二俵  
拾二俵 五俵トモ有リト由モ此取トナレテ  
百拾取トナレテ此取トナレテ

麦 取 中八俵

大豆 取 八斗五升

何れも取 五斗五升

酒 あり 小斗六升 但し新酒は後三斗あり一箱とあり

綿 あり 少くとも

綿実 あり 六拾貫目

東宮百文分 六百日 但し上二百日

薩摩百文分 七貫目

海 あり 七貫文

是ハ十月迄のお湯あり

或日仙卷ありあり 糸と斗

越前石徹白道いそ徳代 半六升入 器六反 十月迄のお湯あり

之河大小石の中にも清年貢糸は拂ひおろしお湯ありはたき

何れも聞えきり

世書のは世書は用はすしお好むかお好むか世書とある  
人餓饑の苦しみと知り奢るといふは味と食は取五穀となら  
とて世書と忘しは清年の皇祖達の恩頼もよく瑞穂志  
とあり豊秋とよきとん<sup>コトホキ</sup>とあり

天保七申年八月十三日昼七時天火大々四斗指の如く東より西に  
飛ぶ其光は國中てらるる如く水一撃雷の如く虚空を飛  
ぶも暴風亦も吹来西返り風はさきとて各家人家樹木吹倒し  
沖中の船はみな文あり江は荒く船は行かぬ船はこぼれ漂

流し友部の中と述すに後叙する事と云ふに雖も然る時  
 小部といふは僅二部の内小田畑吹荒と云ふは其の  
 次中小部物と云ふは其の次の中要部なりと云ふは其の  
 月十日より悪人数と云ふなり一揆なり甲斐國中教倉質屋  
 と打寄り乱信致せし隣玉大小右左人等出浪あり十日  
 十日に於りぬ 奉りて甲斐藩勅用書一巻と形と云ふ事なり  
 是ハ他玉の事と云ひ侍りし十日年九月十日に河本加南郎右衛  
 衛左門下那の教倉質屋と打寄り乱信致せし領下地区の庄屋  
 人等出浪あり十日に於りぬ 奉りて甲斐藩勅用書一巻と形と云ふ事なり  
 此等小部物と云ふは其の次なり

梅津藏相場年代記曰天保五年春米百俵分代金八  
 拾五兩夏代金百八兩秋九拾五兩冬秋とけり

春七十五	春百七十三
夏九十九	百七十五
秋百十八	百四十一
冬百七二	百七十八

是ハ年代記書に通るる米百俵  
 分百七とありし事なり

日七年くらり綿あり百貫 後六貫六百文

天保八年酉正月十二日 白米を納付し百拾六文 日廿六日迄百  
 拾六文 春麦を納付し百拾六文 大麥 百拾六文 小麦 百拾六文  
 小麥 百拾六文 大角麥 百拾六文 さいのり 百拾六文 ちぢこ 百拾六文

とど 百拾八文 榊森六文

日年二月 白米貳百拾貳文

三月 口 北百拾文 稻口以

四月 口 二百拾文

五月 口 北百拾六文

西尾湯瓶米 二斗五升 俵米二斗二升 大麦七斗二升

小麦五斗七升 大豆四斗七升 小麦二斗五升 新上物十七貫目

新六斗 淡六貫九百文 今綿五貫二百文

文不飢饉此苦...のめ...を流り病...家内...  
おのりき

公義...湯憐愍の思...茶方湯瓶出...  
時疫流行の毒...茶と用...具...  
一時疫小大は...豆と能...  
せん...出...  
右醫治...  
一時疫小大若...根...  
右時後備急...  
一時疫小大牛房...  
具上葉...一握...火...  
茶碗...  
茶碗...  
茶碗...

一時疫小大は...豆と能...  
せん...出...  
右醫治...  
一時疫小大若...根...  
右時後備急...  
一時疫小大牛房...  
具上葉...一握...火...  
茶碗...  
茶碗...  
茶碗...

右時後備急...

一時疫小大牛房...  
具上葉...一握...火...  
茶碗...  
茶碗...  
茶碗...

小水四盃入二盃おせんで一盃飲く汗をかきとす若葉  
の毒なく枝をくまよし  
右孫真人食志の書

一時疲れし種にぬのかしよとまらじいひん〜ん〜ん〜ん〜ん  
又芭蕉の根とつきとを汁けとあゆみ飲てよし

右時後備急方本

一切の食物の毒あつさ又色々の草木きの魚鳥獸を  
喰煩は用く其死とのがは

一切の食物の毒あつさくる〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
湯ま〜かききと飲くよし

化草木の毛ふと食て毒あつさたるは、治よし

右農政全書本

一切の食物の毒あつさくる〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜能せん〜飲食と吐せ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

右口ひ

一切の食物あつさ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 右本草綱目本

一切の食物あつさ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 血出〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 血出〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 右衛生易簡本

一切の食物の毒あつさ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 水〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

或度も用くよし莫おりたりたるよし

一切の食物の毒ありては小赤も是れ思焼と粉ふりて

く貝かつわとほ水や用也一穀の毒ありては

右千金方より

一菌と食あてしむる患冬之甚き生むるけと春よし

右夷史志より

右享保十八五年飢饉の後時疫病流行し長祿公義板行は

仰付書付此度右福公申上りて取公長祿公遠者之よし

右切之儀存於 御國板行は 仰付下し

天明四年甲辰五月

天保八年四月御福書も右之通共来

右之某方凶年の節造土の者雜食之毒當り又凶年の

後必疫癘流行の事有り其為之節吹方と撰むる事

は仰出諸書内より後必速也

享保十八辛丑年十月 貞月三英丹お正伯

其後疫病流行し此の町を以て板行は 仰付書科所

村より下し

右當時諸小村に疫病流行し而て輕き者も新食の毒に

高り相類能ふ故に縁相宜し天明四年甲辰年同某方為此救

右福公九年久敷申上り村より後遠矢公儀も右之公府世度



為淨救右之字尚又村々々領之也頭々々々相解々

酉四月

